



佐藤仁・客員研究員 (東大大学院助教授)

「身近な資源が使えない」という逆説的な現象がアジアの各地で起こっている。遠くから運ばれる安価な木材が支配的になって以来、日本では国内の山の木で家を建てるのが難しくなった。「先代が植えた木を伐採し次代のために植林する」というゆとりとしたバトンタッチを市場経済は許さなかった。

画一化に無理

他方、タイやインドネシアでは、特に1970年代ごろから、急速な経済成長と都市の需要を満たすための商業伐採で農村の地元住民が身近な森から排除された。そして、現在では地球環境保護の大義の下に新たな森の囲い込みが見られ、先住民が再び圧迫されている。画一的な「開発」と「環境保護」を急ぐと

土地への愛着保つ利用を

現場を第一に

発想があたりまえでなかったのはなぜか。

き、地域の資源利用者は障害物とし映らない。グローバリゼーションが後押しする画一化の論を自然の利用に当てはめるには無理があった。地球上を自由に動き回るモノや情報とは異なり、自然は個々の場所と一体化しているからである。

門家の発言力を強め、科学と効率の名の下に開発すべき所と保護すべき所を分けてしまおう。そして、生活資源から引き離れた人々は、自分たちの身の回りの場所を守ろうとする動機すら失いつある。このような上からの視点に基づく自然保護は、保護のための予算を増大させた。だが、多額の投資とプロジェクト

にもかかわらず、森林の減少・劣化は止まる気配さえない。それは、金を使わずに森を守る工夫を蓄積してきた地域の知恵を無視してきたためではないか。

それは、政府が有用資源を手放そうとしないからであり、貧しい人々に対する信頼がないからである。インドの経験は、人々の力を見直す価値があることを実証している。伝統にもとれ、というのではない。土地の特性を知り尽くし、何よりもそこに生活を賭けている人を環境保全の主役として活かすのである。

市場原理の下では、一度失われた価値でも再評価されれば値を戻す。ところが、土地への愛着と知恵は一度失われるとなかなか回復しない。一度引き離された身近な自然と地域住民との距離を縮め、人と生態系が息の長い関係を築くには、自然の利用と保護を別々に考えるのではなく、つなげる努力が重要である。

それにはまず、自然から離れて暮らす役人や専門家が率先して現場に赴き、人々の声に耳を傾ける態度をもたなくてはならない。インドの例で見たとように、地域の人が工夫できる余地を広げ、間違っていたら専門家も共に学べるようなゆとりを土地利用の計画に組み込むべきである。

土地利用の画一化は、その場所に暮らさない専

門家の発言力を強め、科学と効率の名の下に開発すべき所と保護すべき所を分けてしまおう。そして、生活資源から引き離れた人々は、自分たちの身の回りの場所を守ろうとする動機すら失いつある。このような上からの視点に基づく自然保護は、保護のための予算を増大させた。だが、多額の投資とプロジェクト

にもかかわらず、森林の減少・劣化は止まる気配さえない。それは、金を使わずに森を守る工夫を蓄積してきた地域の知恵を無視してきたためではないか。

それは、政府が有用資源を手放そうとしないからであり、貧しい人々に対する信頼がないからである。インドの経験は、人々の力を見直す価値があることを実証している。伝統にもとれ、というのではない。土地の特性を知り尽くし、何よりもそこに生活を賭けている人を環境保全の主役として活かすのである。

それは、政府が有用資源を手放そうとしないからであり、貧しい人々に対する信頼がないからである。インドの経験は、人々の力を見直す価値があることを実証している。伝統にもとれ、というのではない。土地の特性を知り尽くし、何よりもそこに生活を賭けている人を環境保全の主役として活かすのである。

市場原理の下では、一度失われた価値でも再評価されれば値を戻す。ところが、土地への愛着と知恵は一度失われるとなかなか回復しない。一度引き離された身近な自然と地域住民との距離を縮め、人と生態系が息の長い関係を築くには、自然の利用と保護を別々に考えるのではなく、つなげる努力が重要である。

それにはまず、自然から離れて暮らす役人や専門家が率先して現場に赴き、人々の声に耳を傾ける態度をもたなくてはならない。インドの例で見たとように、地域の人が工夫できる余地を広げ、間違っていたら専門家も共に学べるようなゆとりを土地利用の計画に組み込むべきである。